

The Blithedale Romance 論

—— 奴隷制廃止運動を巡って ——

藤吉清次郎

(高知大学人文社会科学系人文社会科学部門)

The Blithedale Romance

—— In Terms of the Antislavery Movement ——

Seijiro FUJIYOSHI

Humanities and Social Sciences Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University

Abstract: This paper intends to show how Nathaniel Hawthorne's *The Blithedale Romance* (1852) reflects his opinion in regard to the anti-slavery movement in mid-nineteenth century America. The setting of this story is the utopian socialistic community Blithedale, where Hollingsworth and Zenobia, the main characters, reside. It is true that neither of them are explicitly depicted as abolitionists in the novel, but they are implicitly connected with the slavery abolition movement. Hollingsworth is a philanthropist. But, as Brenda Wineapple observes, abolitionists were called philanthropists or fanatics in mid-nineteenth century America. Feminists such as the character Zenobia, used the rhetoric of feminist abolitionism which emphasized the close connections between feminist reform and antislavery. Hawthorne seems to emphasize, by describing Hollingsworth as if he were a black man and by depicting Zenobia as if she were a haughty Oriental queen, how dangerous they are to the white middle-class society. Zenobia commits suicide, and Hollingsworth feels guilty about her death which was caused by his cold treatment toward her. Their failure suggests Hawthorne's opposition to the anti-slavery movement. In the end, Hawthorne supports middle-class ideologies by having the narrator Coverdale confess his love for Priscilla embodying such ideologies at the end of the story. In this sense, *The Blithedale Romance* can be understood as a work in which what is threatening to the white middle-class society comes under control and order is restored.

キーワード：奴隷制廃止運動，白人中産階級社会，人種表象，ホーソーン

0. はじめに

ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)の第3の長編小説『ブライズデール・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852)は、作者自身がブルック・ファームという理想主義的共同体に参加した経験を基にして書かれた作品である。19世紀中葉アメリカでは様々な社会改革運動が起き、理想主義共同体が各地に作られていたが、ホーソーンの創作動機のひとつはそうした社会改革運動の問題点を取り上げ、考察することにあつたことは間違いない。しかしながら、不思議なことに『ブライズデール・ロマンス』においてホーソーンは19世紀中葉アメリカにおける最大の社会改革運動と思われる黒人奴隷制廃止運動について直接的な言及をしていない。それゆえに従来の批評においても『ブライズデール・ロマンス』と奴隷制問題の関連性を考察する論考はほとんど提出されていないと言ってよい。

その点、『ブライズデール・ロマンス』と同様に、奴隷制問題が直接的にはほとんど描かれていない第1の長編『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)に対する最近の研究動向は大いに参考になる。ジ

ヨナサン・アラック (Jonathan Arac), サクヴァン・バーコヴィッチ (Sacvan Bercovitch),¹ ジーン・フェイガン・イエリン (Jean Fagan Yellin) などの研究者は物語の中に当時の奴隷制問題を読み取っている。例えば、心情的には奴隷制に反対しながらも、即時奴隷制廃止を受け入れることができなかった白人作家ホーソーンの保守主義を解明しようとする J. アラックは、A の文字の持つ "indeterminacy" がこの作家の戦略であり、『緋文字』が "propaganda—not to change your life" であると指摘している (Arac 251)。また J. F. イエリンは拘束状態にあるヘスター (Hester) の人物造型に黒人奴隷と反奴隷制フェミニストの影を読み取りつつも、ホーソーンがヘスターを反奴隷制フェミニストとして十全に機能することを拒絶していると述べている (Yellin 75-97)。

私見では、『緋文字』と同様に『ブライズデール・ロマンス』においても、ホーソーンは奴隷制廃止運動についても自身の意見を暗示的に表明しているように思われる。その点、まず注目すべきは物語の主要な登場人物であるホリングズワース (Hollingsworth) であろう。ホリングズワースは「博愛主義者」という人物設定になっているが、ブレンダ・ワイナップル (Brenda Wineapple) が指摘しているように、19世紀中葉アメリカ社会において奴隷制撤廃主義者 (アボリショニスト) が「博愛主義者」とも呼ばれていた事実を考慮に入れると (Wineapple 251)、ホーソーンがこの事実を意識せずにホリングズワースの人物造型を行ったとは考えがたい。おそらくホーソーンは同時代社会を舞台とする物語において、奴隷制廃止運動の問題を取り扱うことが彼の「ロマンス」にとって、いかに危険であるかを知っていたはずである。そこで、この作家は『緋文字』の場合と同じように、『ブライズデール・ロマンス』においても、ホーソーン流の暗示的な手法を用いることによって、いわば理解できる読者だけに理解されればよいというスタンスで望んだと思われる。

本稿では、『ブライズデール・ロマンス』においてホーソーンが社会改革運動、特に奴隷制廃止運動に対していかなる見解を提示しているのかを論究するために、まずホリングズワースの人物造型を検証したい。次に、ゼノビア (Zenobia) の人物造型、メスメリズムと奴隷制の関連性、作品結末におけるカヴァデール (Coverdale) の告白の意味などを考察したい。

1. 記号としての黒人ホリングズワースを中心に

『ブライズデール・ロマンス』は農業を基盤とする理想主義的共同体に参加した3流の詩人カヴァデールがそこで経験したことを自ら語るという形で展開されるが、彼が共同体で出会った人々のうちでまず注目したい人物はホリングズワースである。犯罪者更正施設の建設を目論むホリングズワースの印象について、カヴァデールは次のように述べている。

Hollingsworth's appearance was very striking, at this moment. He was then about thirty years old, but looked several older, with his great *shaggy* head, his heavy brow, his *dark* complexion, his abundant beard, and the rude strength with which his features seemed to have been hammered out of iron,... His figure was not tall, but massive and brawny, and well befitting his original occupation, ... was that of a blacksmith. (III 28, 強調は筆者による)²

ここでカヴァデールはホリングズワースが知性の人ではなく、元鍛冶屋で野蛮な肉体的な人物であることを強調しているが、注目したいのはこの語り手が "shaggy" と "dark" の単語を使っていることである。実はこのほかにも語り手はホリングズワースの容姿を描写するのに、先に挙げた単語のほかにも "swarthy" や "black" などの単語を執拗に使用している。"his dark, shaggy face" (III 30), "his shaggy brows" (III 42), "In my recollection of his dark and impressive countenance, the features grew more sternly prominent than the reality, duskiest in their depth and shadow,..." (III 71), "a brawny, shaggy, grim, and ill-favored personage" (III 94), "his great shaggy

head" (III 122), " his black brows" (III 132), "a swarthy face" (III 135), "The great, rude, shaggy, swarthy man!" (III 167) このように、語り手は黒い肌、縮れた髪の毛、肉体性を強調することによってホリングズワースをまるで黒人であるかのように描いているのである。

このようなホリングズワースの人物造型はホーソーンの第2の長編『七破風の屋敷』(The House of the Seven Gables, 1851)のジェフレイ・ピンチョン(Jaffrey Pyncheon)判事のそれを想起させる。ジェフレイ・ピンチョンは叔父の財産を独り占めにするために無実の従兄弟のクリフォード(Clifford)を陥れ、彼を罪人に仕立て上げた悪人であるが、彼の風貌について語り手は次のように述べている。

His *dark*, square countenance with its almost *shaggy* depth of eyebrows, was naturally impressive,... Owing, however, to a somewhat massive accumulation of *animal substance* about the lower region of his face, the look was perhaps unctuous, rather than spiritual, and had, so to speak, a kind of *fleshy* effulgence,... (II 116, 強調は筆者による)

ジェフレイの浅黒い顔色と、もじゃもじゃのまゆ毛は、彼が動物的な存在であることを読者に強く印象づけているが、彼は自身の野獣のような食欲さに由来する政治的野心を持ち合わせている人物である。このような人物造型については、別のところで私はジェフレイ・ピンチョンが白人中産階級の価値観を脅かす危険な存在として黒人のイメージで描かれていることを述べた。³ もう少し詳しく言えば、アンテベラム期のアメリカ社会は市場経済が発展し、多くのヨーロッパ人の移民が流入した結果、経済的にも人種的にも不安定な状況になっており、ジェフレイ・ピンチョンの人物造型にはそのような不安定な社会状況が反映されていると考えられるのである。

私がここで『七破風の屋敷』のジェフレイを引き合いに出したのは、ジェフレイと同様に『ブライズデール・ロマンス』のホリングズワースも黒人のイメージで描かれているのではないかと考えているからである。ホリングズワースの容姿はすなわち、彼が社会秩序を乱しかねない危険な要素を内面に秘めていることを反映しているのである。事実、物語が展開していく中で、ホリングズワースの「博愛主義者」の仮面は徐々に引き剥がされ、彼が「巨大な利己主義」("his own huge egotism" III 127)の固まりにすぎないことが明らかになっていく。

例えば、ホリングズワースは共同体に参加しているゼノビアに近づくが、それは彼女が手にするはずの財産目当てであった。ゼノビアに遺産を手にする見込みがないと分かると、彼は彼女にあっさり別れを告げるが、彼女は心ないホリングズワースに向かって次のような激しい非難の言葉を浴びせかける。"Are you a man? No; but a monster! A cold, heartless, self-beginning and self-ending piece of mechanism!" (III 218) この激しい攻撃にとまどったホリングズワースは"Show me one selfish end in all I ever aimed at, and you may cut it out of my bosom with a knife." (III 218)と反撃に出るが、彼女は"It is all self! Nothing else; nothing but self, self, self!... You have embodied yourself in a project." (III 218)と断言する。この言葉はホリングズワースの行動の非道さを糾弾するものであろう。

以上のように、過剰な男性性の持ち主ホリングズワースは黒人のイメージを通して危険な人物として描かれている。自らの目的達成のためなら手段を選ばないホリングズワースに対してホーソーンの批判が込められていることは明白である。しかし、ホリングズワースが犯罪者更生施設計画を目論んだり、またこの人物がかつてジョン・エリオット(John Eliot, 1604-1690)牧師が先住民たちに説教を行った「エリオットの説教壇」("Eliot's Pulpit")と呼ばれる場所で3人の登場人物に語りかけるような人物設定の意図はなんだろうか。こうした人物設定を考えると、ホーソーンが1840年代に活躍したセオドア・パーカー(Theodore Parker, 1810-1860)という人物を少なからず意識していたのではないかと推察される。⁴

セオドア・パーカーは、奴隷制廃止を主張するユニテリアン派の牧師であり、友人にはブルック

・ファームを起こした超絶主義者の牧師ジョージ・リプリー (George Ripley, 1802-1880)らがあり、彼自身ブルック・ファームの近くに住んでいた。ウィリアム・ケイン (William Cain) が指摘するように彼は1840年代、監獄環境改善に興味を抱き、1847年1月31日にボストンにてそれに関する説教を行っている。⁵ 奴隷制廃止主義に関しては、1848年に "To a Southern Slaveholder" というタイトルの過激なエッセイを發表し、1850年に「逃亡奴隷法」が可決されると、彼は奴隷制廃止のために尽力し、実際逃亡奴隷を自宅に匿うなどして、激しく奴隷制に反対した。

しかしながら、もちろんパーカー牧師だけではホリングズワースの人物造型を説明できるものではない。そこで序文で言及したように、この物語においてホリングズワースに対して使われている「博愛主義者」という言葉にこだわってみたい。この点、B. ワイナップルは次のように指摘している。

To [Mary] Mann and friends, Hawthorne's quarry in *Blithedale* was not the counterfeit arcadia of the 1840s nor the troublesome relations between women and men. It was a fractious America, a present-day America, where abolitionists were called philanthropists and fanatics. *Blithedale* was the abolition movement that Hawthorne adamantly refused to join. (Wineapple 251)

ワイナップルによれば、ホーソーンのことをよく知る義理の姉メアリー・マンや友達にとって、『ブライズデール・ロマンス』におけるホーソーンのねらいは1840年代に乱立したえせ理想郷でも男女の問題でもなく、奴隷制問題にあったのである。作品が發表された当時、奴隷制廃止主義者は「博愛主義者」「狂信者」と呼ばれていたものであり、それに即して考えれば、博愛主義者とされるホリングズワースの奴隷制廃止運動との関連は否定しがたいように思われる。

このようにブライズデールと奴隷制廃止運動を結びつけて考えるワイナップルは上記の引用文の少し前のところで当時の状況から判断して "Garrison could be none other than Hollingsworth." という示唆的な見解を提示している (Wineapple 251)。ギャリソンとはいかなる人物か。ウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison, 1805-1879) は当時多くの改革のために奮闘し、*The Liberator* という、奴隷制廃止を支持する新聞を創刊し、編集したことで知られている。ギャリソンは反奴隷制の急進的な立場に立ち、多くの支持者を得たが、その一方で原則に忠実にあろうとするあまり、妥協を嫌い、見解の相違を裏切りとみなす傾向があった。そのため、彼は19世紀の改革者の中でも非常に評価の分かれる存在であった。⁶ その意味では彼は前述した「博愛主義者」「狂信者」の側面を十分有していたということになるであろう。そういえば、『ブライズデール・ロマンス』の第15章「危機」において、ホリングズワースがカヴァデールに自分の計画に賛同することを烈しく求め "Be with me or be against me! There is no third choice for you." (III 135) と迫る場面があるが、ギャリソンとホリングズワースの共通する性質が見えてくるようにも思える。実はホリングズワースはブライズデール共同体の考えの甘さを利用したり、他人の財産を使ったりして、とにかく自らの計画を実現しようと躍起になっている社会改革者なのである。

このようにホリングズワースの人物造型には、奴隷制廃止運動を激しく先導した同時代のパーカーやギャリソンの影響をみるのが可能であると思われる。最後にホリングズワースの人物造型で確認しておきたいのは、彼が元鍛冶屋であることである。ここには1840年代労働者階級の台頭、階級の流動化に対する不安が反映されていると考えられる。いずれにしても、社会改革運動に従事する奴隷制廃止主義者や、労働者のイメージが付与されたホリングズワースは白人中産階級の価値観を脅かす存在として、黒人のイメージで否定的に描く必要があったのである。

2. オリエンタル・クイーンとしてのゼノビア

ゼノビアの人物造型において、まず読者の目を引くのはその官能性である。ゼノビアについて、語り手カヴァデールは "One felt an influence breathing out of her, such as we might suppose to come from Eve, when she was just made, and her Creator brought her to Adam, saying— 'Behold, here is a woman!' " (III 17)と述べ、彼女の過剰な女性性、あるいはセクシュアリティを繰り返し指摘している。カヴァデールは彼女に魅惑されつつも、彼女の並外れた官能性を恐れもしている。

しかし、この女性の人物造型において最も重要なことはゼノビアがフェミニスト（女権拡張論者）であることであろう。社会改革運動、あるいは奴隷制廃止運動の観点から見るとゼノビアの主張は注目に値する。というのも、女性は男性から解放され、自立しなければならないという彼女の主張には当時のフェミニストたちが頻繁に利用した奴隷制廃止論のレトリックが看取できるからである。この点、ロバート・リヴァイン (Robert S. Levine) はプリシラ (Priscilla) という若い女性がメスメリズムの興行師ウェスターヴェルト (Westervelt) の隷属状態にある点に言及したうえで、"With his portrayal of Priscilla as a 'bond-slave' to a patriarchal master, Hawthorne imports into *Blithedale* the rhetoric of feminist abolitionism, which emphasized the close connections between feminist reform and antislavery."と指摘している。⁷ 19世紀中葉のアメリカの女性フェミニストたちは女性たちの虐げられた立場を奴隷のそれと同一視し、奴隷廃止を訴えたのであった。

これまでしばしば指摘されているように、ゼノビアの人物造型にはホーソン自身がよく知る19世紀の代表的なフェミニストであるマーガレット・フラー (Margaret Fuller, 1810-1850) の影響が見られる。彼女はニューイングランドにおいて、女性の自己教育、自主独立、自由を解き、至るところで「談話会」を開き、その才気と雄弁で多くの人の心を引きつけた。その豊かな才能をもつ魅惑的な女性のイメージはゼノビアという名前の由来を想起させる。ゼノビアの名は古代シリアのパルミラ (Palmyra) の女王の名であり、語り手カヴァデール自身、"She [Zenobia] represented the Oriental princess, by whose name we were accustomed to know her." (III 213)と述べている。ゼノビアは才色ともに優れ、その行動力と勇氣は男にまさっていたと言われ、夫の王が亡くなると、自ら軍を率いて、ローマ軍と戦った。結局パルミラ王国はローマ軍に滅ぼされ、ゼノビアは捕らえられて不本意な死を遂げたが、『ブライズデール・ロマンス』のゼノビアの命運がこの古代の女王のそれに重ね合わされていることは明らかであろう。⁸

ここで再び、フラーと奴隷制廃止運動の関係に話を戻せば、彼女もまた、他のフェミニストと同様に女権拡張論を奴隷制廃止論と結びつけて考えていた。フランシス・カーンズ (Francis E. Kearns) が指摘しているように、フラーの代表作『19世紀の女性』 (*Woman in the Nineteenth Century*, 1845) でも二つの運動は結びつけられており、反奴隷制の立場が鮮明に打ち出されている (Kearns 120-1)。⁹ ホーソンにとってフラーの唱える女権拡張論＝奴隷制廃止論はある意味、社会秩序を脅かす危険な要素を有する思想に思えたようである。その点、我々はゼノビアの場合と同様に、その人物造型にマーガレット・フラーの影響が見られる『緋文字』のヘスターの描かれ方を考察する必要がある。ホーソンはヘスターをフラーのように社会改革を夢見る大胆な女性として登場させはするものの、彼女には娘パール (Pearl) とともに7年間ピューリタン社会で忍耐と苦悩の人生を送らせることによって、彼女に耐える力と(他者に)共感する力を授け、保守的な女性へと生まれ変わらせている。ホーソンにとって理想的な女性の在り方は、芸術家として生命力溢れる情熱的な強い女性に魅せられつつも、基本的には社会の秩序を脅かさないような中産階級の価値観に基づく保守的なものであったと考えられる。

もうひとりのフラーの分身であるゼノビアはどうであろうか。彼女にはヘスターが科せられた苦

難の人生も子供養育の任も与えられていない。従ってゼノビアはヘスターが苦悩を通じて手に入れた「共感力」も獲得できず、いわば傲慢なフェミニストのまま悲劇的な形で人生を終えるのである。ホーソーンは同じフラーをモデルとしながらもゼノビアにはヘスターと異なる運命を与えていると言えるだろう。このように考えると、フェミニスト＝奴隷制廃止論者であり、過剰なセクシュアリティを有する女性であるゼノビアが黒人のイメージを使って描かれているホリングズワースと同様に、白人中産階級の価値観を脅かす危険な存在として東洋風のイメージで古代パルミラの女王のような存在として描かれているのは十分納得がいくのである。

3. メスメリズムと奴隷制の関連性

次に『ブライズデール・ロマンス』において、どの部分が奴隷制の問題を反映しているのかを考察していきたい。その点、とりわけ注目すべきはメスメリズムの問題である。このメスメリズムの問題は『七破風の屋敷』の中ですでに重要なモチーフとして取り扱われており、この問題に対するホーソーンの関心の深さがうかがい知れる。メスメリズムとは何なのか。

メスメリズムとは、ドイツの医者であるフランツ・A・メスメル(Franz Anton Mesmer, 1734-1815)が精神・神経の治療の一環として開発した一種の催眠術である。医者は患者に催眠術をかけ、忘我状態にする。まさしくこの忘我状態が患者の魂が霊界をさまよう状態として捉えられ、催眠術によって霊の世界と交信できるという理解が人々の間に広がった。『ブライズデール・ロマンス』におけるメスメリズムの問題、あるいはそれが具現化された催眠術の興行の場面もそのような時代背景を反映したものと思われる。では、メスメリズムの問題と奴隷制はいかなる関係にあるのであろうか。

まず、催眠術の興行の場면을考察していこう。カヴァデールは公会堂でのメスメリズムの興行の見物に行く。そこでプリシラは学者を装った興行師ウェスターヴェルトに催眠術をかけられ、忘我状態に陥ってしまう。プリシラはまさしく人間ではなく「もの」「意志をもたぬ商品」となったと言えるだろう。このようなメスメリズムの問題に関してトーマス・コール(Thomas Coale)は、『ブライズデール・ロマンス』においてホーソーンはメスメリズムを利用することによって奴隷制における心理状態、つまり"psychological domination of master over slave and the willing submission of slave to master"を探求していると指摘している(Coale 113)。

先程述べたように、ホーソーンは前作『七破風の屋敷』(1851)のなかでも、メスメリズムの問題を重要な題材として利用している。メスメリストとしての力をもつホールグレイヴ(Holgrave)は若い女性フィービー(Phoebe Pyncheon)に対して、自作の物語を読んで聴かせているとき、彼女を忘我状態にしてしまうことによって自らの奴隷としてしまいそうになる。ホールグレイヴの作品はピンチン家とモール家の間に起こった忌まわしい過去の出来事、つまりマシュー・モール(Matthew Maule)がアリス・ピンチン(Alice Pyncheon)に催眠術をかけ、生涯彼女を自分の奴隷とした事件を題材とした物語である。もう少し具体的に言えば、紛失した土地証書の在処を探すことを望むアリスの貪欲な父親は若い女性の霊を使って、ものを探す力をもつマシュー・モールに娘のアリスを差し出す。催眠術をかけられたアリスはその後、まさしく生涯マシューの奴隷となったのだった。

[W]hile Alice Pyncheon lived, she was Maule's slave, in a bondage more humiliating, a thousand-fold, than that which binds its chain around the body. Seated by his humble fireside, Maule had but to wave his hand; and, wherever the proud lady chanced to be—whether in her chamber, or entertaining her father's stately guests, or worshipping at church—whatever her place or occupation, her spirit passed from beneath her own control, and bowed itself to Maule. (II 208-9)

アリスの隷属化は確かに、精神的なものであり、肉体的なものでないとされる。しかし、アリスの身体は主人の意志に従って動くのである。モールが手を振るだけで、アリスはいかなる状況にあらうが、彼の命令に従わざるを得ないのである。¹⁰ まさしく彼女は心身ともに黒人奴隷と似た境遇にあるといえる。物語において肝要なのはモールの末裔であり、モールと同じ能力をもつホールグレイヴがフィービーに対して、先祖の犯したような過ちを回避できるかということであるが、ホーソーンは『七破風の屋敷』において、男性が無垢な魂の若い女性をメスメリズムを用いて支配するという描写を通じて、奴隷制問題の本質を比喩的に描いているのである。

『ブライズデール・ロマンス』では、後に述べるように、プリシラはホリングズワースによってウェスターヴェルトの呪術から解放され、自由の身になる。このプリシラの解放については、これまでの作品研究においてあまり重要視されてきていないようだが、それは単に父権制を代表するウェスターヴェルトの搾取からの解放を意味するだけではない。この作品と奴隷制問題の関連性を考慮に入れた場合、この女性の解放の意義は無視できないものだと思われる。このプリシラの隷属状態からの解放に奴隷制の在り方に関するホーソーンのメッセージを読み取ることは可能だろう。そのメッセージがたとえ、現実と乖離したものであり、奴隷制下における黒人たちの真の苦悩に対する作家自身の認識不足を露呈するものとなっていようとも、メスメリズム支配から解放されるプリシラの姿の中に奴隷制に対するホーソーンの考えが暗示的に反映されていると考えられる。

4. ゼノビアの死、ホリングズワースの挫折、そしてプリシラの勝利

ホーソーンは物語の中でゼノビアとホリングズワースというふたりの強烈な個性をもった登場人物を見事に挫折させている。先に改革主義者ホリングズワースの利己主義について述べたが、ゼノビアも彼と同様に、自己中心的人物として描かれている。前述したように、ゼノビアは手にするはずであった遺産が手に入らないことが判明したために、ホリングズワースに捨てられることになるのだが、彼女に財産の相続権を失わせ、その結果彼女を死に追い込む要因は彼女の傲慢な性格にあったように思われる。

物語の中でゼノビアから財産の相続権を剥奪するのは、他ならぬ彼女の実の父親ムーディー老人 (Old Moodie) である。彼は、プリシラに優しくしてやってほしいと懇願したにもかかわらず、ゼノビアがプリシラに冷たくするのを知り、激怒したのである。実はゼノビアはプリシラが自分の異母姉妹であることを知らなかったのである。ここで注目したいことはプリシラが自分の妹であったことをゼノビアが知らなかったという事実ではない。重要なことはゼノビアがウェスターヴェルトに支配された弱々しい存在であるプリシラに対してとった傲慢な態度である。ゼノビアの傲慢さの描写を通して、そしてそのような彼女が主張する、現実から乖離した理想主義を通して、ホーソーンは19世紀中葉のフェミニストたちを少なからず批判しているように思われるが、この点『緋文字』のヘスターの人物造型は大いに参考になる。先に触れたように、彼女はピューリタン社会を壊しかねないほどの強い主張をもつフェミニストとして登場するが、パールという娘とともに、7年間ピューリタン社会で堪え忍ぶ生活を送り、恋人ディムズデール牧師 (Dimmesdale) を失った後、ヘスターは男性に虐待された女性たちに同情し、彼女たちの良き相談相手となったのであった。苦悩と罪意識がヘスターを生まれ変わらせたと言える。しかしゼノビアはヘスターとは異なり、遠い未来に理想を託して生きていく強さも、弱者に共感する力も持ち合わせていなかったのである。

結局、ゼノビアは恋に破れて入水自殺を遂げてしまうわけだが、彼女の死はホリングズワースの人生をも変えてしまう。ゼノビアの自殺によってホリングズワースは始めて自らの罪深さを悟る。ゼノビアの死から数年後、カヴァデールはプリシラと一緒にあったホリングズワースの様子を見る

ために彼の家まで出向き、その様子を次のように述べる。

As they approached me, I observed in Hollingsworth's face a depressed and melancholy look, that seemed habitual; the powerfully built man showed a self-distrustful weakness, and a childlike, or childish, tendency to press close, and closer still, to the side of the slender woman whose arm was within his. In Priscilla's manner, there was a protective and watchful quality, as if she felt herself the guardian of her companion, but, likewise, a deep, submissive, unquestioning reverence, and also a veiled happiness in her fair and quiet countenance. (III 242)

ここには以前の自信に満ちた屈強で野蛮な男の姿は見られない。長い間罪意識に取り憑かれたホリングズワースは自信を喪失し、まるで弱々しい子供のようなものである。そのような夫のそばにはプリシラが典型的な家庭的な女性としてしっかりと寄り添っている。プリシラの穏やかな顔つきには疑いようのない尊敬心と幸福感が漂っているのである。この後カヴァデイルが意地悪くホリングズワースに向かって件の計画の進行状況と、更正させた犯罪者の数を尋ねると、ひとりも更正できておらず、ずっとひとりの殺人者と関わりあってきたという答えが彼から帰ってくる。

このようにして物語は終わるわけだが、われわれ読者はこの結末をどのように捉えればよいのであろうか。フェミニストのゼノビアの死、社会改革主義者ホリングズワースの挫折と悔恨、そしてホリングズワースとプリシラの結婚を貫く価値観とは何であらうか。もちろん、その価値観とはホーソン自身の保守主義の思想に基づくものであろう。だが、疑問として残るのはホリングズワースが同じく黒人表象によって描かれているピンチョン判事と異なり、無力化されたものの、死という処罰を逃れ、プリシラという日常世界の幸福を約束する優しい女性を獲得できるのかということである。ホリングズワースとプリシラの不自然な結婚は単に、当時のセンチメンタルな読者の趣向にあわせてだけのものであろうか。私は、従来否定的に解釈されてきたこのふたりの男女の結びつきに少し積極的な意味を読み取りたい。その点、ウェスターヴェルトの催す催眠術興行の場面におけるホリングズワースの行動は重要な意味を有していると思われる。ウェスターヴェルトがプリシラに催眠術をかけたとき、ホリングズワースは舞台に上がり、その術からプリシラを解放するのである。前述したように、『七破風の屋敷』においてメスメリズムがある意味、奴隷制を隠喩的に表したものであることを考慮に入れれば、ホリングズワースがプリシラをメスメリズムの呪縛から解き放ったという事実は決して軽んじられるべきことではないように思われる。確かに、従来の批評では、プリシラはウェスターヴェルトから逃れたものの、依然として父権制を代表するような存在であるホリングズワースに従属する女性のみであると解釈されることが多いが、¹¹しかし彼女は「奴隷」状態から解放された後、以前の弱々しい主体性のない女性ではない。それは先ほど挙げた引用文のなかのプリシラの人間的成長を見れば明らかであらう。彼女は罪意識で苦しむ夫ホリングズワースをしっかりと支える女性となっているのである。従って、このプリシラの保守的な人物造型にこそ、奴隷廃止運動を含む様々な社会改革運動で激動するアメリカ社会に対するホーソンのメッセージが込められているように思われる。

5. むすび

これまで主に奴隷制廃止運動の観点から『ブライズデール・ロマンス』を考察してきた。ホーソンは物語の中で、奴隷制廃止に関わっていると思われる社会改革主義者(女権拡張論者たちを含む)がいかにか自己中心的であるか、そして彼らが白人中産階級社会にとっていかにか危険な存在であるかを人種表象を用いて描き出している。奴隷制を悪と考えつつも、奴隷制を即時廃止することの

危険性を憂慮するホーソーンは自身の奴隷制反対の気持ちをプリシラのメスメリズムからの解放という形でわずかに示すにとどめ、その主な関心を奴隷制廃止がもたらす脅威に向けざるをえなかったのである。結局『ブライズデール・ロマンス』はホリングズワースを無力化し、ゼノビアを死なせることによって白人中産階級社会にとっての脅威（奴隷制廃止運動に加えて労働者階級の台頭やジェンダー規範のゆらぎを含む）を封じ込め、秩序の回復を現出させた世界を描いたものと言えるだろう。その意味で、物語の結末でカヴァデールが "I —I myself—was in love—with—Priscilla!" (III 247) と告白していることは非常に示唆的である。この告白はカヴァデールがプリシラその人を愛しているというのではなく、彼女が体現する家庭性のイデオロギー、あるいは保守的白人中産階級の価値観への賛同を表していると考えられるのである。

最後に『ブライズデール・ロマンス』が発表された当時の批評家の意見に触れておこう。奴隷制に限って言えば、発表当時ホーソーンの真意は十分には理解されず、批判を浴びることになる。一部の批評家は黒人奴隷トムの悲惨な人生を描き出すことによって奴隷制廃止の必要性を民衆に訴えかけるハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe) の『アンクル・トムの小屋』 (*Uncle Tom's Cabin*, 1852) を賞賛する一方で、『ブライズデール・ロマンス』を辛辣に批判した。例えば、イギリスの『ウェストミンスター・レビュー』 (October 1852) は "Would he [Hawthorne] paint an ideal slave-plantation merely for the beauty of the thing, without pretending to 'elicit a conclusion favourable or otherwise' to slavery?" と述べ、この作家は奴隷制に関して賛否のいずれの結論も出すことなく、ブライズデール農業共同体を理想的な奴隷農園として描き出したいのだろうかと言及し、ホーソーンを批判した。¹² こうした批評にいらだちを覚えたホーソーンの妻ソファイア (Sophia) は 1852 年 10 月 24 日母親のエリザベス・ピーボディー (Elitabeth Peabody) に宛てた手紙の中で、次のように述べている。

I have felt all along that Mrs. Stowe's book was overrated—that it was not profound but exciting—too much addressed to the movable passions—to the deeper soul. Also that it would do no good to the slave. Time will show. ¹³

ここで、ソファイアは奴隷制に関して読者の情動にばかり働きかけるストウ夫人の作品が結局黒人奴隷たちのためにならないだろうという否定的な見解を提示している。このソファイアの見解は彼女が夫ナサニエルの文学作品の良き理解者であること、また彼女が奴隷制に関して文学者としての夫の立場を十分理解していたことを示唆していると思われる。

ホーソーン文学において奴隷制度の問題はストウ夫人の作品のように生々しく描かれるべきものではなく、あくまで暗示的に描かれるものでなくてはならないことをソファイアは把握していたのである。ソファイアはホーソーンが『ブライズデール・ロマンス』において同時代における社会改革運動（女権拡張運動と奴隷制廃止運動を含む）に対してこの作家らしい保守的な見解を提示するなかで、「人間の心の真実」を描き出していることを確信していたと思われる。

注

1. 『緋文字』が発表された 1850 年は、奴隷制をめぐる対立する北部と南部の間で「1850 年の妥協」がなされた年である。南部はカリフォルニアを自由州として認めるかわりに、南部からの逃亡奴隷を北部まで捕まえに行けることを逃亡奴隷法という形で合法化した。これにより奴隷たちは逃亡することによって自由の身分を手に入れる手段を失ったのである。「1850 年の妥協」は奴隷制緩和と奴隷制取締強化という一種の政治的妥協であると考えられる。パーコヴィッチはこの「1850 年の妥協」がホーソーンの『緋文字』に影を落としていると分析してい

- る (Bercovitch 89-110).
2. ホーソーンの作品に関しては, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII. (Columbus: Ohio State UP, 1962-97)を使用した. 巻数, 頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す.
 3. 私は『七破風の屋敷』において, ホーソーンが「中産階級の問題を市場経済や労働者階級の問題と絡ませながら, 人種的視点を交えて描いている」ことを考察した(藤吉, 112).
 4. ホーソーンは『ブライズデール・ロマンス』の序文において, ブルック・ファームにおける参加した有力な人物としてジョージ・リプリーとともにセオドア・パーカーの名前を挙げている.
 5. セオドア・パーカーについては, ウィリアム・ケイン(William Cain)が編集した『ブライズデール・ロマンス』の人物解説を参考にした(Cain, 287). パーカーは1847年1月31日ボストンで"The Dangerous Classes in Society"と題する説教を行っており, その中で大多数の犯罪者が劣悪な環境の産物であると述べ, 犯罪者が罰ではなく, キリスト教の教えを説かれるべきだと主張している. ホリングズワースが犯罪者更生施設建設を目論む博愛主義者であるという人物造型を考えた場合, ホーソーンがパーカーを意識していなかったとは考えがたい.
 6. W. L. ギャリソンについては, ケインの人物解説の一部を参考にした(Cain, 260).
 7. R. S. リヴァインは『ブライズデール・ロマンス』に付した解説文の中で物語における"feminist abolitionism"のレトリックが導入されていることを的確に指摘している(xxiv).
 8. ルーサー・リュデューク(Luther S. Luedtke)は, ゼノビアの人物造型にウィリアム・ウェア(William Ware)の歴史ロマンス『ゼノビア: パルミラの没落』(*Zenobia; or, The Fall of Palmyra*, 1843)の影響が見られると指摘している. この作品は元々1836年から37年にかけて『ニッカボッカー』誌に連載され, 人気を博し, 1840年代, 1850年代に再版され続けた(Luedtke 208). L. リュデュークは"In his romantic novel Ware praised Queen Zenobia's 'marvelous union of feminine beauty, queenly dignity, and masculine power.'"(209)と述べ, 小説の中でゼノビア女王の有する「女性的美しさ」と「男性的力強さ」の素晴らしい合一をウェアが賞賛していると指摘しているが, この指摘はホーソーンの描くゼノビアにも適用できるのではないかと思われる.
 9. マーガレット・フラーは『19世紀の女性』の中で, "As the friend of the negro assumes that one man cannot by right, hold another in bondage, so should the friend of woman assume that man cannot, by right, lay even well-meant restrictions on woman." (20)と述べている.
 10. 福岡和子は「『アリスの物語』が示しているのは性的暴力による支配関係である」(91)という非常に示唆に富む意見を提出している.
 11. 平石貴樹は『アメリカ文学史』の中で「プリシラは、インチキ興行師の支配をのがれても、ホリングズワースとの隷属的な恋愛にあらためて支配されるばかりである」(140-141)と述べているが, 私は, 制限付きではあるがプリシラの主体性回復を積極的に評価したい.
 12. *Nathaniel Hawthorne: The Contemporary Reviews*, 207.
 13. Wineapple, 255.

Works Cited

- Arac, Jonathan. "The Politics of *The Scarlet Letter*." In *Ideology and Classic American Literature*. Ed. Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen. New York: Cambridge UP, 1986.
- Bercovitch, Sacvan. *The Office of The Scarlet Letter*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1991.
- Coale, Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 1998.

- Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century*. Ed. Larry J. Reynolds. New York: W.W. Norton, 1998.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 23vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- _____. *The Blithedale Romance*. Intro. Robert S. Levine. Massachusetts: The Belknap Press of Harvard UP, 2010.
- _____. *The Blithedale Romance*. Ed. William E. Cain. New York: Bedford/St. Martin's Press, 1996.
- Idol, John L. Jr., and Buford Johns, eds. *Nathaniel Hawthorne: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Kearns, Francis E. "Margaret Fuller and the Abolition Movement." *Journal of the History of Ideas* 25.1 (Jan.-Mar., 1964), 120-127.
- Luedtke, Luther S. *Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1989.
- Wineapple, Brenda. *Hawthorne: A Life*. New York: Alfred A. Knopf, 2003.
- Yellin, Jean Fagan. "Hawthorne and the American National Sin." In *The Green American Tradition: Essays and Poems for Sherman Paul*. Ed. H. Daniel Peck. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989.
- 平石貴樹 『アメリカ文学史』 東京：松伯社, 2010年.
- 福岡和子 『「他者」で読むアメリカン・ルネサンス——メルヴィル・ホーソン・ポウ・ストウ——』 京都：世界思想社, 2007年.
- 藤吉清次郎 「『七破風の屋敷』における「中産階級」の形成と人種問題」『アメリカ文学における階級—格差社会の本質を問う—』 東京：英宝社, 2009年.

* 本論文は、平成23年度科学研究費補助金基盤(C)「ホーソンと人種問題」による研究成果の一部である。

平成23年(2011)11月14日受理
平成23年(2011)12月31日発行